

「裁きの宣告」

2020年10月21日

神である主は、エデンから彼を追い出された。人がそこから取られた土を耕すためである。神は人を追放し、命の木に至る道を守るため、エデンの園の東にケルビムときらめく剣の炎を置かれた。(創世記3章23節～24節)

人とその妻は、神から厳しく禁じられた善悪の知識の木の実を取って食べた。すると、自分たちが裸であることを知り、いちじくの葉をつづり合わせ、腰に巻いた。更に、神の顔を避け、逃れたいという思いが起きてきた。神から、禁断の実を食べたことを指摘されると、人は神が共にいるようにしてくれた妻が取ってくれたので食べたこと、神や妻に責任があるように返答している。妻に問うと、蛇がだましたのだと、責任を蛇になすりつけ、自己正当化している。善悪の知識の木の実を食べたことによって、神との信頼関係、共にある者との愛の関係が破綻してしまった。人間の墮罪が愛の喪失をもたらしたのである。

神はまず、女を誘惑した蛇に対し、裁きを告げている。お前は野の獣の中で最も呪われる。地を這いずり回り、塵を食べる。蛇と女の間には敵意を置く。人は蛇の頭を砕き、蛇は人の踵を砕く敵対関係になる。これは「原因譚」と言われるもので、蛇が地を這い、塵を食する奇妙で、恐怖感を与える動物であることを説明した記述である。蛇にとっては、迷惑千万かも知れないが、「罪と悪」に誘い込む「蛇的」なものは、限りなく存在する。

神は女に対し、「私はあなたの身ごもりの苦しみを大いに増す。あなたは苦しんで子を産むことになる。あなたは夫を求め、夫はあなたを治める」と、裁きを告げる。女は苦しみ、命がけで出産する。安産させる医学は進んだが、難産で、命を落とした女性も多々あっただろう。しかし、出産の苦しみは、命を生み出した大きな喜びに変わる。ところが「あなたは夫を求め、夫はあなたを治める」と言う。女も男も互いに求め、慕い合うことは当然であり、地の生き物を治めてもよいが、対等である妻を治め、支配する時、諍いが起こる。その逆も真である。支配は力の誇示から始まる。神から厳禁された木の実を食べた罪は、自分が裸で恥ずかしく、神から隠れることになる。同時に力の誇示という罪を発生させたのではないか。力の誇示による支配が人間の歴史に深い悲劇をもたらした。

神は人に対し、裁きを告げる。妻の声に従い、食べてはならない木の実を食べるので、地は呪われ、苦しんで食べ物を得ることになる。土は茨とあざみを生えさせ、人は野の草を食べる。土から取られた人は土に帰るまで、額に汗して働かなければならない。エデンの園では、耕し守る嬉しい労働であったが、今や、辛く厳しい、食のための労働になった。そして、塵から造られたので、塵に帰る者、即ち、死ぬべき定めを負う者となった。

人は妻を「エバ」と名付けた。エバは「命」という意味である。命を生み出す、生ける者の母となった。神は二人に革の衣を作って着せた。二人が犯した罪に対する裁きは厳しいものであったが、その背後には、生きていけるような守りと祝福が用意されている。

神のように善悪を知る者となったので、手を伸ばし、命の木から取って食べ、永遠に生きることがないように、神は二人をエデンの園から追い出し、土から取られた人が、土を耕すようにさせた。そして、命の木に至る道を塞ぐため、神を乗せて運ぶ半人半獣の神話的な天使ケルビムときらめく剣の炎を置いて、近づけないようにした。

アダムとエバの墮罪物語は、神信仰に基づいて、人間実存の実像を描き出している。そこに、時代を超えた真理が秘められ、人は、ここに自分自身を見るのである。